第25回東西四大学合唱演奏会 【1976 年（昭和 51 年） 6 月 20/21 日】 東京文化会館

●関西学院グリークラブ

男声合唱組曲	作詩	草野心平
「草野心平の詩」から	作曲	多田武彦
1．石家荘にて	指揮	北村協一
2．天		
3．金魚		
4．雨		
5．さくら散る		

関西学院グリークラブ

男声合唱組曲「草野心平の詩から」

多田武彦

昭和36年（1961年）、私は慶應義塾ワグネル・ソサィエティー男声合唱団から作曲を依頼され、題材を探すうちに、東洋的観念的抒情詩人としての一面をも持っている草野心平氏の幻想的絵画的な一連の詩を拾うことが出来た。

第一曲「石家荘にて」は、詩人が北支石家荘に立った時、その地の月蛾（遊女）を中心に描いたもので、茫漠とした平野の中の一都会での遊女の姿が異様なまでに寂しく美しく想像される。

第二曲「天」は詩人特有の筆法で書いたもの。「五センチの富士」「青ブリキ」等の表現は、奇抜な中にもこの詩人の個性が躍動している。

第三曲「金魚」、作曲するに当って、私はこの詩に心酔し切っていた。「青みどろのなかの金魚を眺めていると、いつのまにかそれが支那火事のように見える。そしてその支那火事は……」と想像したとき、私の背中に快い戦慄が起った。何という見事な表現だろうと思った。この詩一つが、私にこの組曲を作らせたといっても過言ではない。

第四曲「雨」は気楽に読み流せる詩であった。言葉の烈しさやスケールの大きさが気にならないほど日本的な情趣に満ちた湯治場の雨の風景であった。

第五曲「さくら散る」は、本来なら、終始ピアニッシモで歌われる曲にしなければならない内容のものなのだが、詩の精神に反して、終曲としての「はり」を持たせてしまった。しかしながら終戦直後見た、京都嵯峨野小倉山二尊院門前の桜の古木並木から一せいに舞い落ちた桜の花への郷愁は、この曲に十分活かすことが出来たと思っている。